



横浜美術館開館30周年記念 オランジュリー美術館コレクション

ルノワールと パリに恋した12人の画家たち

Chefs-d'œuvre du Musée de l'Orangerie Collection Jean Walter et Paul Guillaume

Press Release

はじめに

横浜美術館開館 30 周年を記念して、オランジュリー美術館所蔵品による「オランジュリー美術館コレクション ルノワールとパリに恋した 12 人の画家たち」を開催いたします。

パリのセーヌ川岸に建つ、オレンジ温室を改修した瀟洒な佇まいのオランジュリー美術館。画商ポール・ギヨームが基礎を築いた同館所蔵の印象派とエコール・ド・パリの作品群は、ルノワールの傑作《ピアノを弾く少女たち》をはじめ、マティス、ピカソ、モディリアーニらによる名作がそろったヨーロッパ屈指の絵画コレクションです。

ギヨームは若き才能が集まる 20 世紀初頭のパリで画商として活動する一方、自らもコレクターとして作品を収集しました。私邸を美術館にする構想を果たせぬまま彼が若くして世を去った後、そのコレクションはドメニカ夫人により手を加えられていきました。そしてこれらの作品群はギヨームとドメニカの二番目の夫の名を冠した「ジャン・ヴァルテル&ポール・ギヨーム コレクション」としてフランス国家へ譲渡され、同館で展示されるようになりました。

本展は同館が所蔵する 146 点の絵画群のうち 13 人の画家による約 70 点が、21 年ぶりにまどまって来日する貴重な機会です。コレクションに秘められた物語とともに、世界中の人々に愛され続ける名品の数々をご堪能ください。

横浜美術館館長 ごあいさつ

横浜美術館開館 30 周年を記念して、オランジュリー美術館が誇る世界屈指の印象派とエコール・ド・パリのコレクションを紹介する展覧会を皆様にお届けできることは、大きな喜びです。

コレクションを形成し、後世へ伝えることは、美術館活動の根幹です。オランジュリー美術館コレクションの基礎を作ったポール・ギヨームは、新しい画家を発掘し、援助し、作品を収集し、美術館で多くの人に享受されることを目指した希代のコレクターでした。

ギヨームの審美眼が見出したルノワールやピカソ、モディリアーニなど、パリを愛した画家たちの傑作の数々をどうぞご堪能ください。

横浜美術館館長 逢坂恵理子

オランジュリー美術館からのメッセージ

オルセー・オランジュリー美術館と横浜美術館は、オランジュリー美術館所蔵の傑作を特別にご紹介することで、昨年 160 周年を迎えた日仏交流を促進させることに寄与します。本展では、横浜美術館開館 30 周年を記念し、セザンヌ、ルノワール、ピカソ、マティス、ルソー、スーティン、モディリアーニ、ドラク、ローランサン、ユトリロらの作品の展示を通し、1920 年代に芸術の都・パリを舞台に繰り広げられたモンパルナスのカフェ文化、そして大画商にしてコレクターであったポール・ギヨームにまつわる物語を紹介します。オランジュリー美術館の改修工事に伴い、20 世紀初頭のフランス美術の真髄を極める約 70 点の絵画群の訪日を実現しました。オランジュリー美術館にとって日本は特別な友好関係を築いてきた国です。牧歌的な雰囲気のあるチュイルリー宮の庭園には、モネの「睡蓮」やルノワールの《ピアノを弾く少女たち》を見に、毎年多くの日本人が訪れます。本展が横浜美術館で開催されることを大変光栄に思います。

ポール・ギヨームは 1920 年代のパリで最も重要な画商の一人でした。彼はマティスやピカソの作品を扱い、モディリアーニやスーティンの才能を見出し、アフリカ・オセアニアの芸術のマーケットを切り拓くことで流行を牽引しました。狂乱の時代において彼が開催した先鋭的な展覧会の数々は、詩人ギヨーム・アポリネールやトリスタン・ツァラの助言や批評を糧に実現されたものでした。そしてポール・ギヨームは、デ・キリコやローランサン、ユトリロを紹介し、新しい具象絵画を擁護しました。それらの多くが、現在ではエコール・ド・パリの傑作として高く評価されているものです。

ギヨームが若くして亡くなると、妻のドメニカは、有名な建築家ジャン・ヴァルテルと再婚し、ルノワール、セザンヌなどの素晴らしい作品群を購入し、コレクションをさらに発展させました。その絵画群は最終的には、1960 年代以降にフランス政府による買い上げが終わり、ルーヴル美術館からほど近く、チュイルリー宮の庭園内にあるオランジュリー美術館にジャン・ヴァルテル&ポール・ギヨーム コレクションとして展示されるようになりました。モネの傑作「睡蓮」とともに、1910 年代から 30 年代というパリでフランス近代美術が輝きを放った時期に形成された素晴らしい作品群です。横浜ではこのコレクションから、選りすぐりの質の高い作品とともに、ポール・ギヨームとアーティストたち、詩人たちの友情を示す資料や、彼の住まいの変遷、アメリカ人コレクターのアルフレッド・バーンズとの関係を示す資料類も展示します。

オランジュリー美術館館長 セシル・ドゥブレー



展覧会の見どころ

I. パリ・オランジュリー美術館コレクションによる 21年ぶりの展覧会

同館の所蔵作品のほとんどは常設展示されており、館外にまとめて貸し出されることは極めて稀です。過去には1998年に「パリ・オランジュリー美術館展」が東京ほか全国5会場で開催され、計100万人以上を動員しました。今回日本では21年ぶりに珠玉のコレクションを一望できます。

II. ルノワールの代表作《ピアノを弾く少女たち》が来日

《ピアノを弾く少女たち》は、ルノワールの作品の中でも最も有名なもののひとつ。オランジュリー美術館蔵のこの愛らしい作品は、晩年までルノワールのアトリエに保管され、作家没後の1928年にポール・ギヨームが収集したものです。

III. パリに恋した画家たち13作家の名品が一堂に

本展では印象派の巨匠ルノワールをはじめ、マティス、ピカソなど芸術の薫り高いパリに集い、新しい絵画表現の探究に魂を捧げた13人の画家たちを紹介します。本コレクションに含まれるのは、19世紀末から20世紀前半というフランス近代美術が花開いた重要な時期の名品です。

IV. コレクションをめぐる画商ポール・ギヨームと 妻ドメニカの物語に注目

ポール・ギヨームは、既に評価の定まった画家たちだけでなく、当時無名だった若い作家たちも画商として積極的に支援しました。そして、自分の美意識にかなった作品を収集し、美術館をつくることを夢見ました。ギヨームは若くして亡くなりますが、妻のドメニカはその遺志を受け継ぎ、最終的に「ジャン・ヴァルテル&ポール・ギヨーム コレクション」としてフランス国家に譲りました。本展では、コレクターの美術館設立への夢や、画家たちとの友情の物語に注目します。

〈本展監修者〉
セシル・ジラルドー
オランジュリー美術館
文化財学芸員



幸せな音楽が画面から聞こえてくる。
ルノワールの代表作《ピアノを弾く少女たち》が来日。



オーギュスト・ルノワール

《ピアノを弾く少女たち》

1892年頃、油彩・カンヴァス、116.0×81.0cm

Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Franck Raux / distributed by AMF

本作はルノワールの代表作のひとつです。政府からリュクサンブール美術館のための作品を依頼されたルノワールは、ピアノの前に座る二人の少女をテーマに少なくとも6点の油彩画を制作したといわれます。そのうち国家が買い上げた作品は、現在オルセー美術館に収蔵されています。オランジュリー美術館蔵の本作は、晩年まで画家のアトリエに保管され、没後の1928年にポール・ギヨームが収集したものです。伸びやかで柔らかい筆致によって画面全体を美しい色彩の調和で満たしています。顔を寄せ合い楽譜をのぞき込む少女たち。画面からピアノの音色と少女たちの声が聞こえてくるようです。

ルノワールと パリに恋した12人の画家たち

アルフレッド・シスレー

クロード・モネ

オーギュスト・ルノワール

ポール・セザンヌ

アンリ・ルソー

アンリ・マティス

パブロ・ピカソ

アメデオ・モディリアーニ

キース・ヴァン・ドンゲン

アンドレ・ドラク

マリー・ローランサン

モーリス・ユトリロ

シャイム・スーティン

アルフレッド・シスレー

(1839パリー1899モレ=シュル=ロワン)

《モンビュイソンからルヴシエヌへの道》

1875年、油彩・カンヴァス、46.0×61.0cm

Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Thierry Le Mage / distributed by AMF

シスレーはパリに生まれたイギリス人の画家。若い頃ロンドンでコンスタブルやターナーの絵に感銘を受けて画家を志します。パリに戻り、モネやルノワールとともに戸外で風景画を制作し、印象派に参加しました。風俗や静物はあまり描かず、パリ郊外の穏やかな自然を主題とした作品が多いのが特徴です。本作はなだらかな丘の上から遙かにセーヌ河を望む風景。明るく広い空のもとで、馬車や人々が道を行き交うのどかな田園の情景が、優しい色彩で描かれています。



印象派からエコール・ド・パリまで

19世紀後半、急速に近代化が進んだパリでは、それまでの伝統的なアカデミスム絵画に対抗し、全く新しい画風を打ち立てようとする動きが生まれました。彼らは戸外にカンヴァスを持ち出し、光の一瞬の美しさを素早い筆致で捉えようと試みました。そして印象派が誕生します。

20世紀に入り、印象派の新しさが理解され始めると、若い画家たちは更なる革新性を求め、原色を用い強い筆致を際立たせるフォーヴィスム（野獣派）や、事物を写實的に描くという表現を根本的に問うキュビスム（立体派）などの動きも生み出します。さらに第一次大戦を経たフランスでは、戦争の惨禍から立ち直るために、人間性の回復が唱えられました。芸術の中心であったパリには、イタリア出身のモディリアーニをはじめ多くの外国人芸術家が集っており、哀愁を帯びたパリの街並みやそこで生きる人々の姿を個性豊かな表現で描き、エコール・ド・パリと呼ばれました。

フランス近代美術が最も輝いていた時代に生きた、13人の画家たち。彼らの画風はそれぞれ独創性に富み、その創作が後の世代に与えた影響も計り知れません。



クロード・モネ

(1840パリー1926ジヴェルニー)

《アルジャントウイユ》

1875年、油彩・カンヴァス、56.0×67.0cm

Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Franck Raux / distributed by AMF

モネは印象派を代表する画家の一人。屋外で風景を描き、筆触分割を用いて光や大気の一瞬の表情を捉えました。アルジャントウイユはパリから汽車で約15分のセーヌ河岸の町で、当時は週末の舟遊びの場として賑わっていました。モネは1871年から7年ほどこの地に住み、光あふれるセーヌの風景を描きました。本作は画面の大部分を空と水面が占め、左に岸を眺める構図から、モネが水上のアトリエ船から描いたと考えられます。



オーギュスト・ルノワール

(1841リモージュー1919カーニュ=シュル=メール)

《ピアノを弾くイヴォンヌとクリスティーヌ・ルロル》

1897-98年頃、油彩・カンヴァス、73.0×92.0cm

Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Franck Raux / distributed by AMF

ルノワールは印象派を代表する画家の一人。モネとともに筆触分割を用いて外光表現を追究しましたが、風俗画や肖像画で才能を発揮しました。本作に描かれた二人の女性たちは、ルノワールの友人アンリ・ルロルの娘です。ルロルは画家で美術品を収集し、音楽も愛していました。楽しみにグランド・ピアノを弾いているルロルの娘たちの背景の壁には、交流のあった画家ドガの作品がかけられています。

ポール・セザンヌ

(1839エクス=アン・プロヴァンスー1906エクス=アン・プロヴァンス)

《りんごどビスケット》

1879-80年頃、油彩・カンヴァス、45.0×55.0cm

Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Franck Raux / distributed by AMF

セザンヌは近代絵画の父と呼ばれるフランスの画家。印象派展に参加しましたが、うつろう光や近代都市風俗を追究する画家たちとは一線を画し、山や静物、水浴する人々など、同じモチーフを繰り返して描き、堅牢で量感のある絵画世界を構築しようとしてきました。本作では、鍵付きの物入れの上に置かれた鮮やかな色の林檎と青い皿の配置、壁紙の花柄など、すべての要素を緊密に関連づけ、緊張感のある画面を作っています。





アンリ・ルソー

(1844ラヴァル―1910パリ)

《婚礼》

1905年頃、油彩・カンヴァス、163.0×114.0cm

Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

ルソーは「素朴派」を代表する画家。パリの税官吏として働きながら日曜画家として絵画制作をはじめました。平面的な彩色と単純化した形体の独自の様式で、パリの風景や人々、猛獣のいる幻想的風景などを描きました。本作は、木立の中で花嫁を中心に人々が集う記念写真のような作品。後列右から二人目がルソー本人と言われます。花嫁の宙に浮かぶような表現や前列に座る黒い犬が、不思議な雰囲気を画面に与えています。

アンリ・マティス

(1869ル・カトー＝カンブレジ―1954ニース郊外)

《赤いキュロットのオダリスク》

1924-25年頃、油彩・カンヴァス、50.0×61.0cm

Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Michel Urtado / Benoit Touchard / distributed by AMF



マティスはフォーヴィスム（野獣派）を主導した画家。パリに出て、ルオーやドラン、ヴラマンクらと出会い、強烈な色彩と激しい筆致の作風を確立しました。1917年からしばしば南仏ニースに滞在し、モロッコ旅行の体験をもとに、オダリスクを主題とする装飾性豊かな作品を描きました。室内の空間性や女性の肉体の生々しさは希薄で、全体が赤を基調とする装飾のなかに溶け込んでいます。



パブロ・ピカソ

(1881マラガ―1973ムージャン)

《布を纏う裸婦》

1921-23年頃、油彩・カンヴァス、160.0×95.0cm

© 2019 Succession Pablo Picasso-BFC(JAPAN), Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Franck Raux / distributed by AMF

ピカソはスペインに生まれた20世紀最大の画家のひとり。20世紀初頭にパリに出て、1904年にモンマルトルのアトリエ「洗濯船」に拠点を定めました。そこで、ギヨーム・アポリネールらと交流し、アフリカ彫刻にも関心を寄せ革新的なキュビズムを追求する端緒となりました。その後古典を意識した秩序ある画風への回帰をみせますが、本作は、新古典主義時代と呼ばれるこの時期のピカソの典型作。量感豊かな裸婦が画面一杯に描かれた、モニュメンタルな作品です。

アメデオ・モディリアーニ

(1884リヴォルノ―1920パリ)

《アントニア》

1915年頃、油彩・カンヴァス、82.0×46.0cm

Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

モディリアーニはイタリア出身のエコール・ド・パリの画家、彫刻家。1914年、ポール・ギヨームに出会い、その才能を高く評価されたモディリアーニは、ギヨームからアトリエを提供されました。この頃に画家は多くの肖像画を手掛け、独自の画風を築きます。本作では縦長の画面の垂直軸に、卵型の頭と円錐型の長い首、それに連なる三角形の襟元がほぼ対称に描かれています。簡略した形態による安定した構図によって、静謐な画面が生み出されています。



キース・ヴァン・ドンゲン

(1877デルフスハーフェン―1968モナコ)

《ポール・ギヨームの肖像》

1930年頃、油彩・カンヴァス、100.0×74.0cm

Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

ヴァン・ドンゲンはオランダ出身の画家。1899年にパリへ出て1906年からは「洗濯船」に住まい、ピカソらと交友を深めました。鮮やかな色彩と力強い筆致が特徴的な画風を追求し、フォーヴィスムの旗振り役となりました。本作は、ギヨームが38歳で美術編集者、批評家としてレジオン・ドヌール勲章を受章したすぐ後に描かれたのでしょう。胸元には勲章の赤いリボンが描かれ、若くして国家からの受賞の栄に浴したギヨームの自負と自信を感じさせます。

アンドレ・ドラン

(1880 シャトゥー—1954 ギャルジュ)

《アルルカンとピエロ》

1924年頃、油彩・カンヴァス、175.0×175.0cm

Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

ドランはパリ郊外の都市シャトゥー出身で、フォーヴィスムの代表的な画家として活躍しました。1923年にギヨームがドランの画商となって以来、両者の信頼関係は画商の没年まで続きました。劇場のふたりの道化役を主題とした本作は、ギヨームが発注した作品。完成した作品は、ギヨームの自宅の壁に長らく掛けられていただけでなく、ドランによるドメニカ夫人を描いた肖像画の背景にも画中画として描かれており、作家と画商の双方にとってお気に入りの作品であったようです。



マリー・ローランサン

(1885 パリ—1956 パリ)

《マドモアゼル・シャネルの肖像》

1923年、油彩・カンヴァス、92.0×73.0cm

Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

ローランサンはパリ出身のエコール・ド・パリの画家、彫刻家。1906年頃から「洗濯船」に出入りするようになり、ピカソやドランと出会います。また一時期、詩人アポリネールの恋人でもありました。本作は、1920年代のパリでモード界の寵児であったココ・シャネルの注文による肖像画です。しかしシャネルは完成した絵に満足せず、受取りは拒否されました。この対応を受け、ローランサンはシャネルのことを「田舎娘」と揶揄したといわれています。



モーリス・ユトリロ

(1883 パリ—1955 ダックス)

《サン＝ピエール教会》

1914年、油彩・厚紙、76.0×105.0cm

Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

ユトリロはパリ出身のエコール・ド・パリの画家。孤独な少年時代を過ごした後、アルコール依存症治療の一環として油彩を学び、身近なパリの風景を情感豊かに描きました。本作はユトリロが酒に溺れつつも、画家として最も充実した時期と評価される「白の時代」の晩期に手掛けられました。モチーフは、生家に近く画家に幾度となく靈感を与えたモンマルトルのサン＝ピエール教会です。異なる筆致の使い分けにより生み出される絵の具の豊かな表情の中に、パリの街に漂う哀愁を観る者に伝えていきます。



シャイム・スーティン

(1893 スミロヴィッチ—1943 パリ)

《小さな菓子職人》

1922-23年、油彩・カンヴァス、73.0×54.0cm

Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Thierry Le Mage / distributed by AMF

スーティンはリトアニア育ちのエコール・ド・パリの画家。1913年にパリに出て、モンパルナスのアトリエ「蜂の巣」で暮らしました。長らく極貧生活を強いられましたが、1923年にギヨームの仲介で、アメリカの収集家バーンズが《菓子職人》(1919年作)を高く評価し、転機を迎えます。本作はその後少なくとも6点描かれた「菓子職人」のうちの一作です。制服を着て働く市井の人々はこの画家が好んだ主題であり、素早く強烈な筆致と大胆な歪曲に、本作家の真骨頂をみることが出来ます。

ポール・ギヨームとドメニカ夫人の物語 ～画商コレクター 邸宅美術館の夢～

オランジュリー美術館とは

オランジュリー美術館は、19世紀後半から20世紀初頭のフランス美術を収蔵・公開するフランスの国立美術館です。2010年よりフランス国立公益法人オルセー美術館と同じ組織になり、オルセー美術館のコレクションを補完する役割を果たしています。

美術館の建物は、19世紀中頃にチュイルリー宮の庭園に建てられたオレンジ温室を改装したものです。1920年代にモネが「睡蓮」の大型連作を国に寄贈する際、外光のもとで鑑賞できる場所としてオランジュリーが選ばれ、二つの楕円形の展示室が作られました。1960年代には、国家が購入した「ジャン・ヴァルテル&ポール・ギヨーム コレクション」がオランジュリー美術館で公開されることになり、睡蓮の間の天窓を塞ぐように2階に展示室が設けられました。その後、2000年から2006年にかけての改修工事により、「睡蓮」の連作を外光のもとで鑑賞できるように2階部分が撤去され、ヴァルテル&ギヨーム コレクションのための常設展示室と企画展示室が新たに地下に作られて現在の姿となりました。

現在オランジュリー美術館は、印象派とエコール・ド・パリの珠玉のコレクション、モネの「睡蓮」連作、そして斬新な企画展の三つの魅力を楽しめる、パリを訪れる美術ファン必見のスポットとなっています。



M
O Musées
d'Orsay et
de l'Orangerie



フォッシュ通りのギヨーム邸宅の様子（1932年頃）

オランジュリー美術館所蔵品の核をなす「ジャン・ヴァルテル&ポール・ギヨーム コレクション」は、ヨーロッパの中で最も質の高い印象派とエコール・ド・パリの作品群のひとつ。

このコレクションの基礎を築いたのは、才気あふれるフランスの画商ポール・ギヨームです。彼は自動車修理工場に勤めていた時に、アフリカからの輸入品の中にガボンの仮面を発見。それを工場のショーウィンドウに飾ったことで、詩人のギヨーム・アポリネールの目に止まり、前衛芸術家たちとの親交が始まりました。まもなくアフリカ彫刻のプロカーとして商いを始めたギヨームは、1914年にはアフリカ芸術のみならず同時代の美術を扱う画廊を開設しました。

彼はモディリアーニやスーティンら、当時は評価が確立していなかった画家たちも積極的に支援しました。そして、アメリカの富豪バーンズにフランスの前衛美術を売り込むことにも成功します。彼は、自身のコレクションも築き、自邸を美術館とする構想も抱きましたが、その夢を実現することなく42歳で死去しました。ギヨームの没後、コレクション

の所有権は妻ドメニカ（本名ジュリエット・ラカーズ）に引き継がれました。

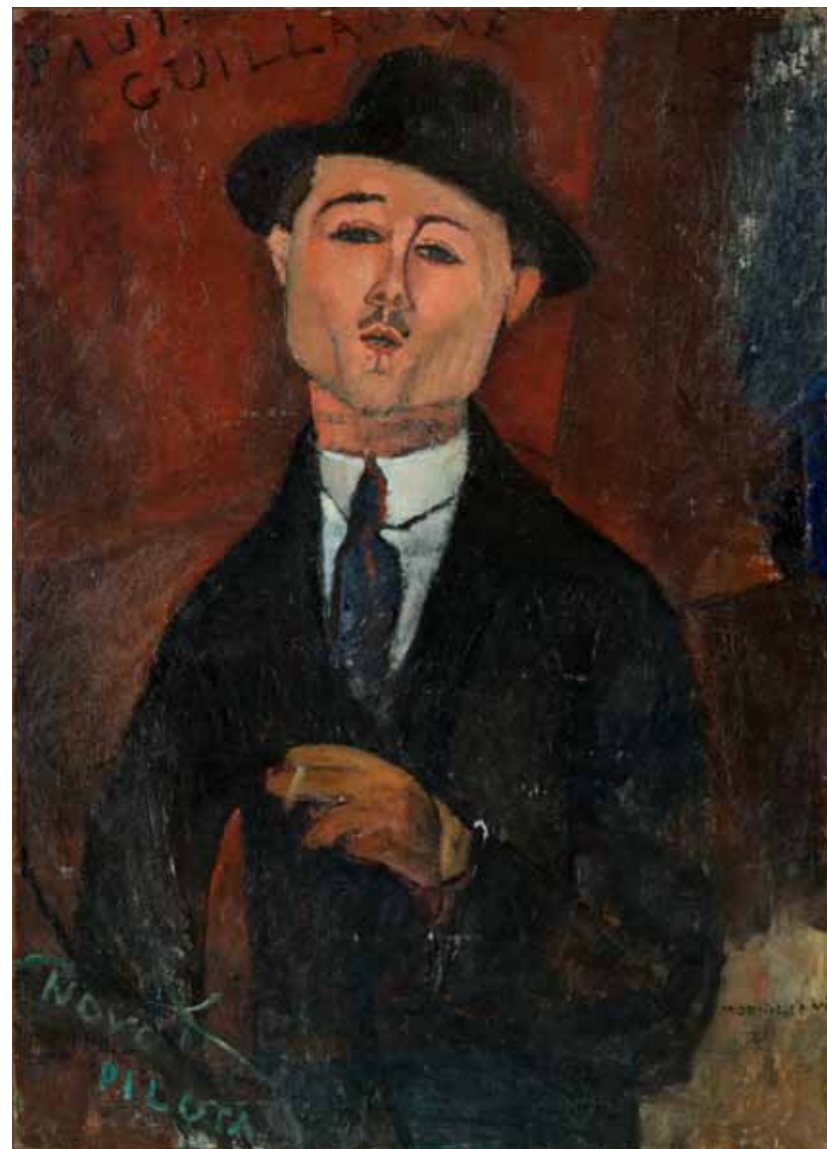
ドメニカは、ほどなく養子を迎え入れるとともに、有名建築家のジャン・ヴァルテルと再婚します。そして自分の好みに応じて前衛的な作品を中心に200点余りを売却し、より古典的で調和のとれた温厚な画風の絵画をコレクションに加えました。さらにヴァルテルが事故で亡くなると、養子との不仲により生じた暗殺未遂の訴訟問題というスキャンダルによって世間の注目を浴びました。

彼女は最終的にヴァルテルとギヨームの二人の名前を冠することを条件とし、1950年代以降、コレクションを国家に売却。このコレクションは彼女の没後、オランジュリー美術館に常設展示されるようになりました。

【ポール・ギョーム (1891-1934)】

- 1891 (0歳)：パリの一般庶民の家庭に生まれる。
- 1908 (17歳)：勤務先の自動車修理工場でアフリカから届いた荷物の中にガボンの仮面を発見。工場の窓に飾り、アポリネールの目に止まる。若手芸術家たちとの親交が始まる。
- 1914 (23歳)：パリに画廊を開く。
- 1918 (27歳)：雑誌『パリの芸術』を創刊。
- 1920 (29歳)：ドメニカと結婚。
- 1934：死去。(享年42歳)
- 1941：ドメニカが建築家ジャン・ヴァルテルと再婚。
- 1957：ヴァルテル死去。
- 1959/1963：コレクションが2回に分けて国家に売却される。
- 1977：ドメニカ死去。
- 1984：オランジュリー美術館でのコレクションの常設展示が始まる。

Photo ©RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Archives Alain Bouret, image Dominique Couto / distributed by AMF



アメデオ・モディリアーニ

《新しき水先案内人ポール・ギョームの肖像》
1915年、油彩・厚紙を貼った合板、105.0×75.0cm
Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

この作品は、モディリアーニがギョームをモデルに描いた4点の肖像画のうちの第1作目。画面には画商の名前のほか、「ノヴォ・ピロータ (新しき水先案内人)」、「ステラ・マリス (海の星、聖母マリアを暗示する)」、そしてダビデの星などが描き込まれています。ギョームは当時若干23歳でしたが、画家にとっては先行きが不安な人生に指針を与え、希望をもたらす存在であったのでしょう。



暗殺疑惑もかけられた
謎多き美女
ドメニカ夫人は
どう描かれた？

マリー・ローランサン

《ポール・ギョーム夫人の肖像》
1924-28年頃、油彩・カンヴァス、92.0×73.0cm
Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

1920年にギョームと結婚したドメニカは、その華やかな顔立ちや気の強い性格によりモンパルナスの社交界や芸術家たちのサークルの中でも目立つ存在でした。本作は彼女が26歳の時の肖像画で、大きな瞳とすっとした鼻筋に、聡明さを感じさせる彼女の美貌がよく捉えられています。



アンドレ・ドララン

《大きな帽子を被るポール・ギョーム夫人の肖像》
1928-29年、油彩・カンヴァス、92.0×73.0cm
Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

ローランサンによる女性的で柔らかい印象の肖像画とは対比的に、この肖像画からはドメニカ夫人の芯の強さが伝わってきます。国家へのコレクション売却の前後には、養子の暗殺をめぐるスキャンダルで世間を騒がせ、彼女のプライベートにまつわる様々な噂が飛び交いました。本作は彼女が30歳頃に描かれたのですが、既にそのミステリアスな一面をうかがわせます。

展覧会名 |

横浜美術館開館30周年記念

オランジュリー美術館コレクション

ルノワールとパリに恋した12人の画家たち

Chefs-d'œuvre du Musée de l'Orangerie Collection Jean Walter et Paul Guillaume

会場 | 横浜美術館

会期 | 2019年9月21日[土]～2020年1月13日[月・祝]

休館日 | 毎週木曜日(12月26日は開館)、12月28日[土]～1月2日[木]

開館時間 | 10:00～18:00(入館は17:30まで)

*会期中の金曜・土曜は20:00まで開館(ただし9/27～28、1/10～12は21:00まで)*入館は閉館の30分前まで

主催 | 横浜美術館、オルセー・オランジュリー美術館、読売新聞社、テレビ朝日

後援 | 在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本

協賛 | 損保ジャパン日本興亜、大日本印刷、野村総合研究所、みずほ銀行

協力 | 日本航空、ルフトハンザカーゴAG、東急電鉄、みなとみらい線、横浜ケーブルビジョン、
FMヨコハマ、首都高速道路株式会社

観覧料(税込) | 一般1,700(1,500/1,600)円、

大学・高校生1,200(1,000/1,100)円、中学生700(500/600)円

*小学生以下無料

*65歳以上の当日料金は1,600円(要証明書、美術館券売所でのみ販売)

*()内は前売/有料20名以上の団体料金(要事前予約、美術館券売所でのみ販売)

*障がい者手帳をお持ちの方と介護の方(1名)は無料

*観覧当日に限り本展の観覧券で「横浜美術館コレクション展」も観覧可

*前売券は6月1日[土]から9月20日[金]まで販売。

お問合せ | 03-5777-8600(ハローダイヤル)

展覧会公式サイト |  <https://artexhibition.jp/orangerie2019/>

Masterpieces from the Musée de l'Orangerie, Jean Walter and Paul Guillaume Collection

Open Hours: 10:00-18:00(10:00-20:00 on Fridays and Saturdays/ 10:00-21:00 on Sep. 27, 28, Jan. 10,11,12) *Admission until 30 minutes before closing.

Closed: Thursdays and Dec. 28 to Jan. 2 *Except Dec. 26

《報道関係のお問い合わせ》

「ルノワールと12人展」広報事務局

〒150-8551 東京都渋谷区渋谷1-3-9 ヒューリック渋谷一丁目ビル3F

TEL: 03-3409-1481 FAX: 03-3499-0958 E-mail: orangerie2019@ypcpr.com

横浜美術館 | 〒220-0012 神奈川県横浜市西区みなとみらい3-4-1

TEL: 045-221-0300(代) FAX: 045-221-0317 <https://yokohama.art.museum>

アクセス ●みなとみらい線(東急東横線直通)「みなとみらい駅」3番出口から徒歩3分

●JR、横浜市営地下鉄「桜木町駅」から「動く歩道」を利用、徒歩10分



本展はパリのオルセー・オランジュリー美術館の学術協力のもとに企画され、数多くの名画が特別に出品されます

Exposition organisée et réalisée avec la collaboration scientifique et les prêts exceptionnels du Musée d'Orsay et de l'Orangerie, Paris